

2004012P1A

平成16年度厚生労働科学研究費補助金健康科学総合研究事業
「未成年者の喫煙実態状況に関する調査研究」班

2004年度

未成年者の喫煙および飲酒行動

に関する全国調査

(確定版)

総括研究報告書

2005年9月

主任研究者 国立保健医療科学院次長 林 謙治

2004年度未成年者の喫煙および飲酒行動に関する全国調査報告書

主任研究者 国立保健医療科学院次長 林 謙治

分担研究者	国立保健医療科学院疫学部長	箕輪真澄
	日本大学医学部公衆衛生学教授	大井田隆
	国立療養所久里浜病院精神科長	鈴木健二
	国立精神・神経センター精神保健研究所薬物依存研究部長	和田 清
	鳥取大学医学部環境予防医学分野助教授	尾崎米厚
	国立保健医療科学院疫学部主任研究官	谷畑健生

I. 未成年者の喫煙および飲酒行動に関する全国調査

1. はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2. 対象と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
3. 研究結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
4. 集計表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
5. 添付資料・調査票・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

II. 青少年の喫煙行動に関する全国調査 (Global Youth Tobacco Survey 対応分集計)

1. 対象と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
2. 研究結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
3. 集計表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66

III. わが国の成人の分煙に関する知識、受動喫煙曝露の実態に関する全国調査

1. 対象と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
2. 研究結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
3. 集計表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
4. 調査票・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 86

IV. 青少年の生活習慣と健康・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88

I. 未成年者の喫煙および飲酒行動に関する全国調査

1. はじめに

現代は、未成年者の喫煙および飲酒問題は医学や教育の分野を超えて大きな社会問題となっている。これは、未成年者の薬物使用とも関連して、ますます関心が高まっている。

子どもの喫煙による、急性及び慢性の健康影響は数多く知られている。急性影響では、呼吸器症状、体調レベルの低下、血管の変化、気管支上皮の変化、妊娠中の問題および肺の発達遅延等これらだけでも喫煙をしない十分な理由になるほど多くの健康影響が報告されている。慢性影響では、肺がんをはじめとして多くのがん、心血管系疾患、肺気腫、慢性気管支炎、壊疽、歯肉疾患、咽頭の感染、血圧上昇、胃潰瘍など多くの疾患のリスクを上昇させている。これらは喫煙期間が長いほど、すなわち未成年の内から吸い始めるほどリスクが大きくなり、がんの原因の中では予防可能な最大の原因であるとさえ言われている。しかし、たばこの成分であるニコチンは容易にニコチン依存を引き起こし、従って止めるのが極めて困難である。従って、未成年の内にとばこを吸わないようにしたり、既にいる喫煙者を禁煙するように支援することは極めて重要である。

アメリカ合衆国をはじめとして欧米諸国では、あるものは青少年の健康問題を含めた生活全般に関する調査で、またあるものは薬物使用に関する調査の一部として国家的な規模で未成年者の喫煙行動が調査されてきている。しかも、その多くは定期的に行われており、経時的な変化もつかめ各国の未成年の喫煙対策に重要な情報を提供してきている。一方、我が国には、未成年喫煙禁止法があるにも関わらず、多くの未成年者がすでに喫煙していると考えられているが、全国を代表するような青少年の喫煙行動についての調査は過去には行われておらず、近年になり1990年、1996年、2000年の3度行われているが、1990年度調査の調査方法の違いにより喫煙行動の動向を比較できるのは、1996年度調査と2000年度調査の結果だけであった。

未成年者の飲酒問題は、アルコールによる健康障害のみならず交通事故や非行等さまざまな問題と関連があり大きな社会問題となっている。また、飲酒行動が低年齢で開始されるほどそれらの問題は大きいと言われ、中高生からの飲酒教育が重要視されている。アメリカ合衆国をはじめとして欧米諸国では、あるものは青少年の健康問題を含めた生活全般に関する調査で、またあるものは薬物使用に関する調査の一部として国家的な規模で未成年者の飲酒行動が調査されてきている。しかも、その多くは定期的に行われており、経時的な変化もつかめ各国の未成年の飲酒問題対策に重要な情報を提供してきている。一方、我が国には、未成年飲酒禁止法があるにも関わらず、多くの未成年者がすでに飲酒していると考えられているが、全国を代表するような青

少年の飲酒行動についての調査は1996年度と2000年度の2回行われたのみであった。

また、未成年者の喫煙や飲酒行動に関連する要因を明らかにすることは、喫煙対策や飲酒対策を策定するに当たって重要な情報を提供することにもなる。わが国の21世紀の健康づくり国民運動である健康日本21においても、未成年者の喫煙と飲酒をなくすことは重要な目標となっており、1996年度調査の結果が国の目標値の基準値(ベースライン値)として採用されている。今回の2004年度調査は2005年に行われる健康日本21の中間評価にも活用されることになっている重要な調査である。

2. 調査方法

1) 調査対象および調査内容

調査デザインは断面標本調査であった。調査は全国の中学校および高等学校(全日制の私立・公立高校)を対象とした。2003年5月1日現在の我が国の学校名簿である2004年全国学校総覧に登録されている中学校11,060校、高等学校4,627校のうち中学校131校、高等学校109校を抽出して調査を行った。調査時期は2004年12月～2005年1月末であった。

a) 抽出方法

抽出方法は1段クラスター抽出であった。全国の中学、高校の中から対象校を無作為に抽出した。在校生徒数に比例して抽出確率が決まるように比例確率抽出を用いた。抽出した学校の在校生すべてを調査対象とした。1996, 2000年度調査との違いは今までは地域ブロックを層とした送別1段クラスター抽出であった点である。日本全国から無作為に学校を抽出する今回の方法は、今までの方法と少し異なるが、抽出された対象校の地域偏在は認められなかったため、実際には今までの調査とほぼ同じ方法であるといえる。今回の調査の利点は、調査結果の値の点推定、信頼区間計算が楽なことである。

抽出標本数(サンプルサイズ)は、1996年度、2000年度に行った中高生の飲酒及び喫煙行動に関する全国調査の結果から得られた学校回答率、結果の分散に基づく信頼区間の幅を参考に今までとほぼ同じとした。喫煙率及び飲酒率の95%信頼区間が中学で±0.2%、高校で±0.5%の水準となる。各地域ブロック別にみた抽出校数と回答校数は表1に示すとおりであった。

b) 調査内容

調査内容は、1996年度調査、2000年度調査の調査票をもとに、世界保健機関(WHO)と米国疾

病予防管理センター（CDC）が推進している Global Youth Tobacco Survey（GYTS）の質問項目を参考に決定した。

調査内容は、飲酒行動としては、飲酒頻度、この30日間の飲酒日数、様々な場面の飲酒経験、飲酒量、初めの飲酒年齢、初めての仲間との飲酒年齢、飲む酒の種類、酒の入手経路、父母兄弟友人の飲酒状況、この30日間に酒を売ってもらえなかったことがあったか、父母から酒を勧められたことがあるか、未成年飲酒禁止への意見、酒の体への害の認識、酒を飲んだ上の失敗の経験であった。

喫煙行動としては、喫煙経験の有無、喫煙経験年齢、この30日間の喫煙日数、平均喫煙本数、タバコの入手経路、禁煙の意思、父母兄弟友人の喫煙状況、現在の喫煙状況、この30日間にタバコを売ってもらえなかったことがあったか、普段の喫煙場所、朝夕タバコを吸いたいか、父母からタバコを勧められたことがあるか、タバコの体への害の認識、よく吸う銘柄、銘柄変更の有無であった。GYTSに対応した項目は、喫煙経験、経験年齢、30日間の喫煙日数、平均喫煙本数、タバコの入手経路、よく吸う銘柄、この30日間のタバコ代、この30日間のこづかい、この30日間にタバコを売ってもらえなかったことがあったか、普段の喫煙場所、朝起きてすぐ吸いたいか、であった。これはGYTSのコア項目13のうちわが国には適していない、タバコを買うときにいくら払うか（タバコ製品の価格がまちまちの国にあてはまる）、紙巻タバコ以外のタバコ製品を吸ったか（わが国は紙巻タバコ以外はほぼ無視できるほどシェアが小さい）を除いたものに相当する。

生活に関しては、朝食喫食状況、クラブ活動参加状況、学校は楽しいか、悩みを親に相談するほうか、将来の希望進路、この30日間のタバコ代、この30日間の酒代、月平均のこづかい、よく読む漫画雑誌名、睡眠の質、平均睡眠時間、平均就寝時間、寝付きにくい経験、中途覚醒の経験、早朝覚醒の経験、集中できるか、心配事があって眠れないことがあったか、生きがいを感じるか、簡単に物事を決められるか、ストレスを感じたか、問題を解決できずに困ったか、日常生活を楽しく送れたか、問題を積極的に解決しようとしたか、気が重くて落ち込んだか、自信を失ったか、役に立たない人間だと思ったか、幸せだと感じたかであった。後半は睡眠障害、こころの健康に関する質問群であった。

2) 調査の実施

a) 調査手順

抽出学校の学校長宛に調査の協力を依頼する文書と共に在校生と全数分の調査票を送付した。調査の協力を受諾した学校は、各教室内で担任が調査票を配布して調査を行った。生徒は自記式

無記名の調査票を記入直後、各自に同時に配布された糊付き封筒に調査票を封入した。調査に際しては、喫煙や飲酒を肯定したり、否定したりする発言をしないこと、生徒の調査票記入中に席を回ったり、のぞき込んだりしないこと、調査開始時にこれはテストではないのでありのままを書くように言うこと、先生は封を開けないのでプライバシーは守られると言うことを教師に守ってもらうように調査の実施手引きを配布した。教師は封筒を回収し、封を開けないままに宅急便にて国立保健医療科学院まで返送してもらった。

b) 調査票回収状況

中学校は132校に依頼し、92校より協力が得られた（学校協力率 70.2%）。地域ブロック別にみると回答率にややばらつきがみられ、関東Ⅱ、関東Ⅰ、四国、東北、近畿Ⅰでやや低かった（表1）。高等学校は109校に依頼し、87校から協力が得られた（協力率 79.8%）。地域ブロック別にみると近畿で低い傾向が認められた（表1）。しかし、中学、高校とも地域ブロック別の協力率の大きな格差は認められなかった。調査票は103,650通回収され、性別あるいは学年が不明なもの、および回答内容に矛盾のあった1,199通を除いた102,451通を解析対象とした。たとえば、ある質問で「飲酒したことがない」と回答しながら別の質問で「毎日飲む」と回答した場合や現在の年齢より高い年齢で初めて喫煙したと回答した場合などを矛盾データとして除外した。

そのうち中学の有効回答数は39,385通であり、協力校生徒数の88.4%（有効回答率）、調査対象者総数の60.7%であった。高校の有効回答数は63,066通で、協力校生徒数の86.3%（中高あわせて87.1%）、調査対象者数の67.7%（中高あわせて64.8%）であった。学校協力率は、2000年度調査と比較して、中学で減少し、高校で増加した。有効回答率は、中高ともに2000年度調査よりやや低かった。

c) 集計解析

集計はSPSS for Windows version 13.0 (SPSS Japan Inc.)で行った。

3. 結果及び考察

1) 飲酒行動

a) 飲酒状況

性別学年別飲酒状況をみると、飲まないと回答した者の割合が男女とも学年が上がるにつれ減少していた（表2）。一方、月1～2回飲酒、週末ごとの飲酒および週数回の飲酒をする者の割合

は男女とも学年が上がるにつれ増加した（表2）。週1回以上飲酒する者の割合は男子では中学1年で2.4%（1996年4.4%、2000年3.9%）であったのが、高校3年では11.4%（1996年16.8%、2000年17.0%）にも上っていた。女子では、中学1年で2.2%（1996年3.1%、2000年3.3%）であったのが高校3年では7.6%（1996年7.0%、2000年8.7%）に上昇した。飲酒率は減少傾向にあり、特に男子において顕著であった。男子は女子より飲酒率が高かった。

この30日間の飲酒日数をみると、男女とも0日の者の割合が学年が上がるにつれ減少し、1日以上の者の割合が上昇する傾向にあった。この30日間に10日以上飲酒した者の割合は中学1年男子で1.1%（1996年1.9%、2000年1.3%）であったのが、高校3年男子では5.7%（1996年7.0%、2000年7.5%）に上昇した。同様に中学1年女子では0.8%（1996年1.3%、2000年1.2%）であったのが、高校3年女子では3.0%（1996年2.5%、2000年3.2%）と上昇した（表3）。

b) 飲酒機会

飲酒機会別の飲酒経験率を見ると冠婚葬祭が男女とも高かった。家族と一緒にいるときも経験率が高かった。この2つの機会は学年が低いときから経験率が高く学年が上がってもさほど上昇しないが、「クラス会、打ち上げ、コンパの時」「居酒屋、カラオケボックス、飲み屋で仲間と」「誰かの部屋で仲間と」飲んだとする者の割合は学年が上がるにつれ急激に上昇した。飲酒機会別の経験率はどの機会も男女差は小さかった（表4）。これらの飲酒経験の1つでも経験した者を飲酒経験者とする、男女とも学年があがるにつれ経験者率は上昇し、高校3年ではかなりの割合にのぼった。2004年調査では1996、2000年調査と比較して、男女、中高とも飲酒経験率が低下したが、今回初めて、全ての学年で女子の経験率が男子を上回った（表66）。

c) 飲酒量

飲酒量は答えやすくするためにコップで何杯かに聞き方を統一した。学年が上がるにつれ少量の飲酒をする者の割合が減少し、多量の飲酒をする者の割合が増加した。飲酒するときにはコップ6杯以上飲む者の割合は学年が上がるにつれ増加し、中学1年男子では1.7%（2000年0.8%）にすぎなかった者が高校3年男子では18.3%（2000年14.5%）にのぼった。中学1年女子では0.9%（2000年0.6%）であったのが、高校3年女子では9.3%（2000年7.7%）となった。特につぶれるまで飲むと回答した者の割合が高校3年男子で9.7%（2000年10.9%）も認められ、高校3年女子でも4.6%（2000年4.2%）に認められた（表5）。

d) 初めての飲酒年齢

初めての飲酒年齢をみると、学年が低いほど低年齢で初めて飲酒したと回答している傾向にあった。これは、現在の学年に近い学年を回答する傾向にあるためといえる。すなわち、この現象をもって飲酒経験の低年齢化とはいえない（表6）。2000年調査と比較して、飲酒経験年齢がやや上昇していた。これは、飲酒経験の高年齢化、すなわち望ましい方向への変化といえる。

本調査では、問題飲酒のひとつの入り口として仲間といっしょに飲むことを上げ、初めて仲間と飲んだ年齢を尋ねた。仲間と初めて飲んだ年齢は、初めて飲んだ年齢よりも高い傾向にあった。男女とも現在の学年に近い年齢を回答するが多かった（表7）。2000年調査結果と比較すると、仲間との飲酒においても経験年齢の高年齢化という望ましい変化が認められた。

e) よく飲むお酒の種類

よく飲むお酒の種類は男女ともアルコール度が低く甘いお酒（果物味などの甘いお酒）が最も多かった。2000年調査では男子はビールが最も多かったので、男女とも果物味の甘いお酒がトップとなった。高校では果物の味の甘いお酒に次いで、焼酎およびサワー類も多く飲まれており、中学2年以上の女子ではビールよりもよく飲まれている。焼酎およびサワー類は低学年では多くはないが、学年が上がるにつれ急激に増加した。逆に、ビールと果物味などの甘いお酒は低学年でも飲まれていた（表8）。

中学1年男子の42.7%（1996年58.0%、2000年50.9%）がビールを飲んでおり、その割合は学年があがるにつれゆるやかに上昇し高校3年男子では59.5%（1996年77.5%、2000年66.5%）であった。男子では果物味の甘いお酒を飲む者がどの学年でも飲酒者の5割以上に認められた。また、ウイスキー、ブランデー、ウォッカといった強いお酒を飲む者は男子では学年が上がるにつれ増加し、高校3年では飲酒者の11.1%（1996年20.9%、2000年12.1%）に認められた。強い酒を飲むものの割合が減少したが、焼酎類を飲む者の割合が大幅に増加した（高校3年男子2004年54.2%、2000年34.5%、1996年29.3%）。女子ではどの学年でも飲酒者の6～7割以上の者が果物味の甘いお酒を飲んでいて（表8）。比較的飲酒頻度が低い者にもよく飲まれている酒の種類は果物味の甘いお酒、ビールであった。女子でも強い酒を飲むものの割合がやや減少し、焼酎類を飲むものの割合が増加した（高校3年女子、2004年54.7%、2000年42.2%、1996年33.8%）。

f) お酒の入手経路

中学、高校ともに男女とも家にあるお酒を飲む者が多かった。その割合は学年があがるにつれ

い) お酒を親に勧められた経験

親にお酒を勧められたことがあると回答した者は男女とも学年が上がるにつれ増加し、高校3年では4割近くに上った(表16)。男女差はあまり認められず、2000年度調査に比べ勧められた割合がやや減少した。

じ) 未成年の飲酒禁止に対する意見

未成年の飲酒禁止に対する意見では、中学1年では男女とも「当然である」とする者の割合が最も高いが、学年が上がるにつれ減少し、逆に「しかたがない」、「法律で決める必要はなく個人の好きにさせればよい」と思う者が増加した。高校にはいると、「しかたがない」が「飲酒禁止が当然である」より高くなり、高校2年からは、「個人の自由でよい」も「禁止で当然」より高くなった(表17)。2000年調査と比較すると、男女とも「当然である」の割合が増加し、「個人の自由でよい」の割合が減少した。これは、望ましい方向の変化といえる。

く) 飲酒の健康におよぼす影響についての認識

飲酒の身体への影響についての認識を訪ねる質問では、飲酒は身体に「害がある」と回答した者の割合が最も高かったが、「多少害があるが大したことはないと思う」と回答した者の割合もかなり高かった。男子では学年が上がるにつれ「多少害がある」と回答する者の割合が増加し、「身体によい」「良くも悪くもない」と回答した者の割合もやや増加した(表18)。2000年調査と比較すると、男女とも「害がある」と回答した者の割合が増加し、その他の項目がやや減少した。これも、望ましい方向の変化といえる。

こ) お酒を飲んで失敗した経験

お酒を飲んで失敗した経験は「吐いた」「記憶が消えた」「親にしかられた」の順に多かった。いずれも学年があがるにつれ割合が上昇した(表19-1)。いずれの経験率も男子の方が高かったが、記憶が消えた、や親にしかられた割合は男女差が小さかった。月飲酒者数を分母とすると、高校3年男子の飲酒者の24.9%(1996年37.9%、2000年34.7%)が既に「吐く」ことを経験しており、11.7%(1996年20.4%、2000年16.8%)が「記憶が消えた」ことを経験していた(表19-2)。警察沙汰を起こした人も既に認められた。「吐いた」「記憶が消えた」という失敗が多い割には、親にしかられていないことが明らかになった。2000年調査と比較すると全回答者数を分母とする

い) お酒を親に勧められた経験

親にお酒を勧められたことがあると回答した者は男女とも学年が上がるにつれ増加し、高校3年では4割近くに上った(表16)。男女差はあまり認められず、2000年度調査に比べ勧められた割合がやや減少した。

じ) 未成年の飲酒禁止に対する意見

未成年の飲酒禁止に対する意見では、中学1年では男女とも「当然である」とする者の割合が最も高いが、学年が上がるにつれ減少し、逆に「しかたがない」、「法律で決める必要はなく個人の好きにさせればよい」と思う者が増加した。高校にはいると、「しかたがない」が「飲酒禁止が当然である」より高くなり、高校2年からは、「個人の自由でよい」も「禁止で当然」より高くなった(表17)。2000年調査と比較すると、男女とも「当然である」の割合が増加し、「個人の自由でよい」の割合が減少した。これは、望ましい方向の変化といえる。

く) 飲酒の健康におよぼす影響についての認識

飲酒の身体への影響についての認識を訪ねる質問では、飲酒は身体に「害がある」と回答した者の割合が最も高かったが、「多少害があるが大したことはないと思う」と回答した者の割合もかなり高かった。男子では学年が上がるにつれ「多少害がある」と回答する者の割合が増加し、「身体によい」「良くも悪くもない」と回答した者の割合もやや増加した(表18)。2000年調査と比較すると、男女とも「害がある」と回答した者の割合が増加し、その他の項目がやや減少した。これも、望ましい方向の変化といえる。

こ) お酒を飲んで失敗した経験

お酒を飲んで失敗した経験は「吐いた」「記憶が消えた」「親にしかられた」の順に多かった。いずれも学年があがるにつれ割合が上昇した(表19-1)。いずれの経験率も男子の方が高かったが、記憶が消えた、や親にしかられた割合は男女差が小さかった。月飲酒者数を分母とすると、高校3年男子の飲酒者の24.9%(1996年37.9%、2000年34.7%)が既に「吐く」ことを経験しており、11.7%(1996年20.4%、2000年16.8%)が「記憶が消えた」ことを経験していた(表19-2)。警察沙汰を起こした人も既に認められた。「吐いた」「記憶が消えた」という失敗が多い割には、親にしかられていないことが明らかになった。2000年調査と比較すると全回答者数を分母とする

と失敗の経験の割合は男女、中高とも減少したが、月飲酒者を分母とすると「親にしかられた」も含め、すべての失敗の警官が男女、中高ともに高くなっていた。これは、飲酒率の減少に伴い全体の中での失敗経験割合は減少したが、飲酒者の中での失敗経験が増えていることを意味し、問題飲酒の集積化が心配される結果となった。

2) 喫煙行動

a) 喫煙経験者率、喫煙率

性別学年別喫煙経験者率をみると、男女とも学年が上がるにつれ喫煙経験者は増加した。男子では中学1年生で経験者率は13.3%（1996年29.9%、2000年22.5%）あり、高校3年では42.0%（1996年55.6%、2000年55.7%）であった。女子でも中学1年生で経験者率は10.4%（1996年16.7%、2000年16.0%）あり、高校3年では27.0%（1996年38.5%、2000年36.7%）であった（表20）。男女とも、喫煙経験率がどの学年でも減少したが、特に男子で減少が大きかった。

学年別に初めての喫煙経験年齢を尋ねたところ、男女とも現在の年齢か前年の割合が高かったが、中学以前では男女、中高ともに10歳という回答が多かった（表21-1）。喫煙経験者を分母とすると喫煙経験年齢に大きな男女差は認められなかった（表21-2）。今までの調査では経験学年を尋ねていたが、今回はGYTSにあわせるため年齢を尋ねたため、結果の比較には注意が必要である。なお、中学などに年齢が高いものが少数いるが、年齢だけでは矛盾データとは必ずしもいえないため有効データとしている。

この30日間に1日以上喫煙した月喫煙者率は中学1年男子で3.2%（1996年7.5%、2000年5.9%）であったが、学年が上がるにつれ増加し、高校3年では21.7%（1996年36.9%、2000年36.9%）にのぼった。毎日喫煙者（30日間毎日喫煙）の割合は中学1年ではわずか0.4%（1996年0.7%、2000年0.5%）にすぎなかったのが、高校3年男子では13.0%（1996年25.4%、2000年25.9%）に達し、月喫煙者のかなりの部分を占めるに至った。女子でも中学1年の月喫煙者率はわずか2.4%（1996年3.8%、2000年4.3%）であったが、学年が上がるにつれ増加し高校3年では9.7%（1996年15.6%、2000年16.2%）に達した。毎日喫煙者も中学1年では0.2%（1996年0.4%、2000年0.4%）であったのが、高校3年では4.3%（1996年7.1%、2000年8.2%）となった。男女とも中高とも、喫煙率の大幅な減少が認められた。特に男子における減少幅が大きかった（表22、65）。

b) 喫煙本数、たばこの入手経路

月喫煙者における1日平均喫煙本数をみると、中学1年男子では1本未満の者の割合が高く、ついで2-5本の者であったが、学年が上がるにつれ2-5本が増加し、高校では6本以上が増加し、高校3年では10%以上が21本以上であった。中学1年女子では2-5本の者の割合が高く、学年があがるにつれ増加し、高校3年では減少した。6本以上吸う者の割合は学年とともに増加した。男女を比較すると男子のほうがやや喫煙本数が多い傾向にあった(表23)。

喫煙者のたばこの入手方法をみると、中学1年の男子では自動販売機が最も多く、次いで家にあるたばこを吸った、誰かからもらった、が多かった。これらは喫煙習慣が成立している者の割合が低く、喫煙量も少ないからであると考えられる。喫煙を始めたばかりの者のたばこ入手を周囲の喫煙者のたばこが支えているといえ、このような場合、家族内に喫煙者がいて家にたばこが置いてある状況は好ましくないと言える。学年が上がるにつれ自動販売機、コンビニエンスストア・スーパーマーケット・ガソリンスタンド等の店、たばこ屋で買う者の割合が増加した。高校3年男子では月喫煙者の84.2%(1996年74.4%、2000年75.7%)が自動販売機から買っており、コンビニやたばこ屋といった対面販売の場でもそれぞれ49.0%(1996年40.3%、2000年49.8%)、23.4%(1996年26.0%、2000年25.1%)の者が買っていた。家にあるたばこを吸ったとする者の割合は学年とともに減少したが、誰かからもらったと回答した者の割合はあまり変化がなかった。中学1年女子では誰かからもらったと家にあるタバコが、最も多く、次いで自動販売機、であった。女子でも学年が上がるにつれ自動販売機、コンビニ等およびたばこ屋で買う者の割合が増加した。特に自動販売機で買う者が増加し、高校3年女子では喫煙者の80.0%(1996年46.5%、2000年51.8%)が自動販売機を用いていた。次いでコンビニ等の店で買う43.3%(1996年19.5%、2000年26.2%)誰かからもらった26.8%(1996年23.9%、2000年21.4%)、タバコ屋で買う10.9%(1996年8.7%、2000年7.3%)であり、女子でもかなりの喫煙者が対面販売の場で購入していることが明らかになった(表24)。これらは、業界(全国たばこ販売協同組合連合会)の自主規制により1996年より順次始まった自動販売機の夜間稼働停止(夜11時より翌朝5時まで)およびコンビニ等における未成年者へのたばこや酒類販売禁止の徹底の効果がほとんど現れていないという結果であるといえる。

c) 禁煙の希望

月喫煙者に占める、タバコをやめたい者の割合は、中高、男女ともつき喫煙者の2割前後に認められた。タバコの本数を減らしたい者の割合は男女とも中学で10%前後、高校女子で10%強、

高校2-3年の男子で約17%であった。禁煙にすでに取り組んだことがある月喫煙者は男女とも中学1,2年では10%台だったが、中学3年以降では20-27%にのぼった。したがって、中高生の喫煙者の多くは、やめたいあるいは禁煙に取り組んだ経験がすでにあるといえ、中高生の禁煙支援も重要な取り組みであるといえる（表25-1、25-2）。

d) 周囲の者の喫煙行動

父が喫煙していると回答した者の割合は、性別、学年別にみると43-49%であった。男子より女子のほうが父が喫煙していると回答した割合が高く、男女と高校より中学で父が喫煙していると回答した割合が高かった（表26）。この父が喫煙していると回答した割合は2000年調査よりも低かった。

母が喫煙していると回答した者の割合は、性別、学年別にみると14-21%であった。男子より、女子で、高校より中学で母が喫煙していると回答した者の割合が高かった（表27）。2000年調査の結果と比較すると母の喫煙率が高くなったことが示唆される（1996年では13~15%、2000年15-19%）であった。

喫煙する兄がいると回答した者の割合は、男女とも学年があがるにつれ増加した（表28）。これは生徒の年齢が高いほど兄の年齢も高く従って喫煙率も高いからだと考えられる。2000年調査と比較すると、吸う兄がいると回答した者の割合は、やや減少した。

喫煙する姉がいると回答した者の割合は、男女とも学年があがるにつれ増加した。これも生徒の年齢が高いほど姉の年齢も高く従って喫煙率も高いからだと考えられる。また吸う姉がいる者の割合には男女差は認められなかった（表29）。姉の喫煙率は兄よりは低く、2000年調査と比較すると吸う姉がいると回答した割合はやや減少した。

喫煙する友人がいると回答した者の割合は、男女とも学年があがるにつれ増加した。特に中学から高校に上がるときに割合が急増した。高校3年男子では70.9%（1996年で82.4%、2000年84.8%）の者がたばこを吸う友人を持っており、女子でも54.3%（1996年で64.8%、2000年67.3%）がたばこを吸う友人を持っていた（表30）。男女とも喫煙する有事があると回答した者の割合が減少した。これは、中高生の喫煙率低下と合致した結果である。

現在の喫煙状況の自己判断をみると、習慣的喫煙者率が学年とともに上昇したが、この値はこの30日間の喫煙日数を尋ねた質問での毎日喫煙者率に近く、それよりやや高い値を示した（表31）。習慣的喫煙者、時々喫煙者、試喫煙者の割合はいずれも2000年調査より低くなり、喫煙したことの無い者の割合が高くなった。

e) タバコを売ってもらえなかった経験

この30日間にタバコを売ってもらえなかった経験をたずねると、全体の1%前後、月喫煙者の4-11%しか、時々売ってもらえなかったと回答したものがいなかった(表32-1、32-2)。多くはいつでも売ってもらえたと回答しており、特に高校の男子で割合が高かった。高校より中学でや売ってもらえなかった者の割合が高かった。男女を比較すると高校ではむしろ女子のほうが時々売ってもらえなかったと回答した者の割合が低かった。これは、買おうとしなかった者がやや多かったことにも一因があるが、助詞でもいつでも売ってもらえたと回答した者の割合がかなり高かった。

f) 喫煙場所

月喫煙者の主な喫煙場所をみると、中学は男女とも、家、公的な場所、友達の家、いろいろな集まりの順で多かった。学校で吸うと回答した者の割合が12-14%も認められた。高校では男女とも、家、友達の言え、王的な場所、いろいろな集まりの順に多かった(表33)。中学より高校で学校で吸うと回答した者の割合が低かった。家の中でも外でもかなりの割合の喫煙者が吸っているといえる。

g) 朝起きてすぐの喫煙

ニコチン依存症が重いと朝起きてすぐに喫煙しないと気がすまなくなる。朝起きてすぐに喫煙したい気持ちがあるか、あるいは実際朝起きてすぐに吸っているかを尋ねたところ、学年があがるにつれ、いつも思うと回答した者の割合が上昇した。時々思うものの加えた値は学年とともに急増し、中学1年の男子18%、女子26%が、高校3年男子62%、女子59%となった。中高生のうちにもニコチン依存症が短期間に成立し、なかなかタバコをやめられない状況に陥っていることが推察される(表34)。

h) 父母に喫煙を勧められたことがあるか

親にたばこを勧められた経験を尋ねると、男子では学年を問わず2-4%が勧められた経験を持っていた。女子では2%前後の者が勧められた経験を持っていた(表35)。

i) タバコの身体への害の認識

たばこの身体への害の認識について尋ねると、男子ではどの学年でも88-95%の者が害があると回答していた。害はないと回答した者は2-3%で、多少あると回答した者は2-3%であった。女子は害があると回答した者の割合はさらに高く、94-95%であり、害はないとする者の割合は1%前後であり、多少あると回答した者の割合は12%であった（表36）。2000年調査と比較して、害があると回答した者の割合が増加した。一方で少数ではあるが害はないと回答したものが存在し、その割合は減っていないため、喫煙状況の2極分化が進んでるのかもしれない。

j) 喫煙銘柄の変更

喫煙者の喫煙銘柄は学年が上がるにつれ変更したとするものの割合が増加した。高校に入ると同じ銘柄を吸い続けるものの割合より変更したものの割合が高くなった（表37）。

3) 生活習慣、学校生活

a) 食習慣

朝食をほとんど毎日食べると回答した者の割合はかなり高かったが、学年があがるにつれ減少していた。また、女子より男子でいつも食べる者の割合が低かった（表38）。2000年調査と比較すると、毎日食べる者の割合が男女、中高ともやや減少していた。

b) クラブ活動への参加

クラブ活動への参加状況をみると、学年があがるにつれ積極的に参加している者の割合が減少した。参加していない者の割合は中学3年で急増した。男子より女子で積極的参加の割合が低かった。（表39）。2000年調査と比較すると、積極的に参加している者の割合が高くなっていった。

c) 学校が楽しいかどうか

学校が楽しいかどうかを尋ねた質問の回答では、楽しいと回答した者の割合が最も高かったが、中学より高校で、女子より男子で楽しいと回答した者の割合がやや低かった（表40）。2000年調査と比較すると、中高、男女とも楽しいと回答した者の割合が増加した。特に高校で増加割合が大きかった。

d) 親に悩みを相談するほうか

親に悩みをよく相談する者の割合は学年に関わらずほぼ一定であったが、男女を比較すると女子で割合が高かった。1996年調査、2000年調査と比較すると、男女ともよく相談すると回答した者の割合が高くなってきている。しかし、質問の選択肢の中では、ほとんど相談しないと会と鬱した者の割合が最も高い。この割合は2000年調査と比較すると減少傾向にあり、望ましい方向への変化は認められている（表41）。

e) 将来の希望進路

将来の希望進路は中学では高等学校と回答した者の割合が最も高く、次いでわからない、大学であった。中学では学年が上がるにつれ高校と回答する者の割合も大学と回答する者の割合も上昇し、わからないと回答した者の割合が減少した。高校では男子では大学と回答した者の割合が最も高く、次いで就職、専門学校であった。女子では大学と回答した者の割合が最も高かったが、学年が上がるにつれ短大、専門学校と回答する者の割合もかなり高くなった（表42）。

f) タバコ代、酒代、こづかい

月喫煙者がこの30日間に使ったタバコ代を尋ねると、学年があがるにつれ、買わないと回答した者の割合が減少し、タバコ代も上昇した。女子より男子でタバコ代は高かった。中学の男女では1000円未満が多かったが、高校女子では2千円以上5千円未満、高校男子では2千円以上1万円未満の割合も高かった（表43-2）。月喫煙者の月平均こづかいは、中学では、千円以上5千円未満が多いが、高校になると3千円以上から1万円未満とともに3万円以上の割合が高く、特に女子で顕著であった。特に高校生のこづかいは多く、タバコ代はその一部にすぎないことがわかった（表43-3）。

月飲酒者がこの30日間に使った酒代を尋ねると、買わないと、無回答または不明が多く、金額を回答した者の割合が高いことがあきらかになった。学年が上がるにつれ、無回答や不明が減少し、金額が高くなる傾向にあるが、高校でも一番多いカテゴリは、千円未満であった（表44-2、44-3）。したがって、月飲酒者のこづかい全体に占める酒代は小さいといえる。月飲酒者の月平均こづかいは、月喫煙者の月平均こづかいより少なかった。

全体の月平均こづかいをみると、月喫煙者や月飲酒者のこづかいより少ない傾向にあった。特に女子でその傾向が顕著であった（表45）。

g) 中高生のよく読む漫画雑誌

中学男子がよく読む漫画雑誌は、少年ジャンプであった。次いで、読まない、大きく差が開いて、少年マガジン、コロコロコミックであった。中学女子がよく読む漫画雑誌は、読まない、少年ジャンプ、少女コミック、りぼんの順であった。高校男子は、少年ジャンプ、読まない、少年マガジンの順であった。高校女子は、世生井、少年ジャンプ、少女コミック、別冊マーガレットの順であった。男子では少年ジャンプが圧倒的に多かった(表46)。

4) 睡眠状況とこころの健康

a) 睡眠状況

中学では、かなりよいと回答した者の割合が最も高く、次いでかなりわるい、非常に良いであった。高校でも同様であったが、男子では非常に良い者の割合が減少し、かなり悪いものの割合が増加した。女子では中高の差は認められなかった。中学では、女子のほうが男子より睡眠の質の自己評価は低かったが、高校では差が無くなった(表47)。

この30日間の1日平均睡眠時間をみると、中学では男女とも7時間未満が最も多く、次いで8時間未満であった。学年があがるにつれ6時間未満の者の割合が増加した。高校では、男女とも7時間未満が最も多いが、次いで男子では、5時間未満、6時間未満、女子では6時間未満、5時間未満の順で多かった。高校では、女子より男子のほうがやや睡眠時間が短かった(表48)。

平均就寝時間をみると、中学1,2年では男女とも午後12時以前が最も多く、次いで、午後11時以前であったが、3年生になると12時以前に次いで、午前1時以前、午前2時以前となった。高校では、1,2年は午後12時以前が最も多く、次いで午前1時以前であった。高校3年男子では、午前1時以前、午後12時以前、午前2時以前の順で多く、女子では午後12時以前、午前1時以前、午前2時以前の順に多かった。学年があがるほど就寝時間が遅くなっていることが明らかになった(表49)。

この30日間に寝付けなかった頻度を尋ねると、中学男子では、全くないと回答した者の割合が最も高く、次いで、時々あった、めったになかったが続いたが、女子では、時々あったが最も多く、ついで、全くない、めったにないであった。高校男子は中学男子と同様であった。高校女子の2,3年も中学女子と同様であった(表50)。

この30日間に寝ている途中で目が覚めてまた寝付きにくかった頻度を尋ねると、中高、男女とも全くないと回答した者の割合が最も高く、ついで、時々あった、めったになかったの順であった(表51)。この30日間の明け方に目が覚めてしまう頻度を尋ねると、中高、男女とも全くないと回答した者の割合が最も高く、ついで、めったになかった、時々あったの順であった(表52)。

b) ころの健康

この30日間に、何をするにも集中できたかを尋ねると、いつもとかわらずできたと回答するものの割合が最も多く、ついで、できた、いつもよりできなかつた、の順が多かつた。しかし、全くできなかつたと回答した者が中学で5-6%、高校で7-8%認められた(表53)。この30日間の心配事による不眠の頻度をみると、全く無かつたが最も多く、次いであまり無かつた、あつたの順が多かつた。学年があがるにつれまったく無かつたと回答した者の割合が減少した。男子より女子で全く無かつたと回答した者の割合が低かつた(表54)。この30日間にいつもより生きがいを感じたか問い問いについては、いつもと変わらなかつたがもっとも多く、ついで、あつた、なかつたの順であつた。学年があがるにつれ、いつもと変わらなかつたと回答した者の割合がやや減少した。男子より女子でいつもと変わらなかつたと回答した者の割合が多かつた。また男女、中高とも10%前後に全く(生きがいを感じるこゝろ)なかつたと回答した者が認められた(表55)。この30日間にいつもより物事を簡単に決めることができたかという問いについては、いつもと変わらなかつたが最も多く、ついで、できた、できなかつたの順であつた。男子より女子のほうがいつもと変わらなかつたと回答する割合が高い傾向が認められた(表56)。この30日間にいつもよりストレスを感じたかどうかと尋ねると、中学男子ではあまりなかつたに次いであつた、が多かつたが、高校男子ではあつたに次いであまりなかつたが、多かつた。中学2年以上の女子ではあつたが、あまりなかつたより多かつた。(いつもよりストレスを感じるこゝろ)たびたびあつたと回答したものもかなり認められ、多くの中高生がストレスを感じていた(表57)。この30日間に問題を解決できず困つたことがあつたか、という問いについては、中高、男女ともあまりなかつたと回答した者の割合が最も高かつた。中学男子ではそれに次いで、全く無かつた、あつたの順であつたが、中学女子、高校の男女では全く無かつたよりあつたと回答した者の割合が高く、男子より女子で高かつた(表58)。この30日間にいつもより日常生活を楽しく送ることができたかという問いに対しては、いつもと変わらなかつたと回答した者の割合が最も高く、次いでできた、できなかつたの順であつた。中学より高校でできたと回答した者の割合が減少した。回答の男女差は小さかつた。(表59)。この30日間に問題を積極的に解決しようとしたかでは、いつもと変わらなかつたが最も多かつた。次いで、できた、できなかつたの順であり、中学より高校でできたと回答した者の割合がやや減少したが、中高の差、男女差は小さかつた(表60)。この30日間にいつもより気が重くて落ち込んだことがあつたかという問いに対しては、中学1,2年男子では全く無かつたが最も多く、次いであまりなかつたであつたが、中学3年男子、中学1,2年女子、高校男子では、あまりなかつたの方が多かつた。中学3年女子、高校女子、あつたが最

も多く、次いであまりなかった、の順であった。高校女子では、全くなかったよりたびたびあったの方が多かった（表61）。特に女子では学年があがるにつれ、かなり多くの者が気分が落ち込むことが多いことが明らかになった。この30日間に自信を失ったことがあったかを尋ねると、中学男子では全くなかったと回答した者の割合が最も高く、次いであまりなかった、あったの順であったが、中学1,2年女子、高校1,2年男子では、あまりなかったが最も多く、次いで、あった、まったくなかったの順であった。中学3年女子、高校女子では、あったと回答した者の割合が最も高く、次いであまりなかったであった。学年があがるにつれ女子では、自信を失うものの割合がかなり高くなることが明らかになった（表62）。この30日間に自分が役に立たない人間だと考えたことがあったかを尋ねると、中学男子では全くなかったと回答した者の割合が最も高く、次いで、あまりなかった、あったの順であった。その他の学年では、あまりなかったと回答した者の割合が最も高かった。高校1,2年の女子ではその次に多かったのが、あったと回答した者であった。この質問でも女子が高学年になると自分が役に立たない人間だと考えてしまう割合が高くなることが明らかになった（表63）。この30日間で幸せだといつもより感じたかという問いに対しては、あったと回答した者の割合が最も高く、中学では次いで、たびたびあった、なかったであったが、高校ではそれに次いで、なかった、たびたびあったの順であった。全くなかったと回答したもののお割合も女子で8%前後、男子で10%に認められた（表64）。

中高生のこころの健康に関する一連の質問により、かなり多くの者が、あまり自信を持てず、生きがいを持って日々を暮らしていない状況が明らかになった。その特徴は、男女や中高でことなることも明らかになった。

表1 地域ブロック別にみた調査協力率

	地域	抽出数	協力数	協力率
中学校	北海道	6	5	83.3
	東北	11	7	63.6
	関東Ⅰ	31	18	58.1
	関東Ⅱ	10	5	50.0
	北陸	6	5	83.3
	東海	15	14	93.3
	近畿Ⅰ	17	11	64.7
	近畿Ⅱ	5	3	60.0
	中国	9	6	66.7
	四国	5	3	60.0
	北九州	9	9	100.0
	南九州	7	6	85.7
	計	131	92	70.2
高等学校	北海道・	13	11	84.6
	関東	35	27	77.1
	北陸・東	18	14	77.8
	近畿	17	9	52.9
	中国・四	11	11	100.0
	九州・沖	15	15	100.0
	計	109	87	79.8
中学	北海道:北海道、東北:青森,秋田,岩手,山形、福島、宮城			
	関東Ⅰ:埼玉,千葉,東京,神奈川 関東Ⅱ:栃木,群馬,茨城,山梨,長野			
高校	北陸:新潟,富山,石川,福井 東海:岐阜,愛知,静岡,三重			
	近畿Ⅰ:京都,大阪,兵庫 近畿Ⅱ:奈良,和歌山,滋賀			
高校	中国:鳥取,島根,岡山,広島,山口 四国:愛媛,香川,徳島,高知			
	北九州:福岡,佐賀,長崎,大分 南九州:熊本,宮崎,鹿児島,沖縄			
高校	北海道・東北:北海道、青森,秋田,岩手,山形、福島、宮城			
	関東:埼玉,千葉,東京,神奈川、栃木,群馬,茨城,山梨,長野			
高校	北陸・東海:新潟,富山,石川,福井、岐阜,愛知,静岡,三重			
	近畿:京都,大阪,兵庫、奈良,和歌山,滋賀			
高校	中国・四国:鳥取,島根,岡山,広島,山口、愛媛,香川,徳島,高知			
	九州・沖縄:福岡,佐賀,長崎,大分、熊本,宮崎,鹿児島,沖縄			

平成8年度調査における回収状況 *平成8年全国学校総覧より抽出

	母集団*	対象校	協力校数	学校協力率(%)	有効回答数	協力校の生徒協力率(%)	有効回答率(%)	全国生徒数に対する割合(%)
中学校	11,274	122	80	65.5	42,798	96.6	64.1	0.9
高等学校	5,330	109	73	67.0	73,016	90.8	62.5	1.6

平成12年度調査における回収状況 **平成12年全国学校総覧より抽出

	母集団**	対象校	協力校数	学校協力率(%)	有効回答数	協力校の生徒協力率(%)	有効回答率(%)	全国生徒数に対する割合(%)
中学校	11,220	132	99	75.0	47,246	89.5	66.1	1.1
高等学校	5,315	102	77	75.5	59,051	88.3	59.3	1.4

平成16年度調査における回収状況 ***平成16年全国学校総覧より抽出

	母集団***	対象校	協力校数	学校協力率(%)	有効回答数	協力校の生徒協力率(%)	有効回答率(%)	全国生徒数に対する割合(%)
中学校	11,060	131	92	70.2	39,385	88.4	60.7	1.1
高等学校	4,627	109	87	79.8	63,066	86.3	67.7	1.7

学校協力率: school response rate
 協力校の生徒協力率: student response rate
 有効回答率: overall response rate